



「多久から発信!SDGs」

「多久から発信!SDGs」



2

飢餓を
ゼロに



した。

東原庁舎中央校
5年1組 高祖 和

私は、夏休みに給食センター体験学習に参加しました。理由は、給食を作るとき、どんなことが大変なのか気になったからです。給食センターでは、玉ねぎの皮をむく機械や野菜を切る機械、一度にたくさんの量を作ることができる大きな鍋など、色々な道具を使って、カレーを作る様子を見せていただきました。大きな鍋をかき混ぜる体験もしましたが、とても重くて大変でした。また、給食を作る前に手洗いや消毒をしつかりしながら清潔チェックをしたり、たくさんの量の給食をお昼の時間に合うよう手分けして作ったりするなど、私たちのためにたくさんの苦勞をしながら作ってくださっていることが分かりました。給食センターでの体験学習を通して、私は好き嫌いをせず給食を食べたいと思いました。給食を残すことは、調理員の方々に失礼だと思ったり、世界中にはお腹がすいても、ご飯を食べることができない子どもたちもいる中、簡単に残してはいけないうる方々への感謝の気持ちを忘れず、おいしく給食を食べたいと思いました。

連載

多久市の指定文化財(19)

多久聖廟―「国史跡」

多久町一六四二番地・一六四三番地

多久聖廟は多久市の歴史と文化を代表する国指定文化財です。江戸時代の元禄12年(1699)、多久四代領主多久茂文は、当地に学問所の設置を希望され、多久御構内(多久家本拠地の東山麓の閑静な東の原の地に、多久邑の学寮(後の東原庁舎)を創設しました。また家臣の子弟(学生)や、誰もが廟舎を目にする毎に「敬」の念が起るようにと、宝永5年(1708)に聖廟を創建しました。廟内には元禄13年に京都の儒学者中村惕斎に依頼鑄造した儒学の祖である孔子の像と四哲の像が祀られ、

以来春秋の祭典は今日まで継承されています。聖廟は明治のはじめに一時荒廃の危機があり、時の佐賀県令(知事)の保存を勧める漢詩などを基に、大塚巳一(廟山)氏らの尽力で保存会が発足しました。その活動は大正10年(1921)3月3日、聖廟建造物と境内、東の山林の一部地域が国史跡指定となり実を結びました。この出来事は多久のみでなく、佐賀県の文化財保護史においても初の出来事となり多久村(当時)民の誇りに繋がりました。

(教育振興課)



▶仰高門(手前)と多久聖廟



▶国史跡標識(大正13年建立)

市民文芸

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

- ◆冷麦に 浮かせし氷ひそやかに
溶けゆくが聞こゆ 一人居の昼餉
川浪 信子
- ◆あつという間に 霧の景色が消えていく
須臾の間の人生 みるがごとくに
尾形 節子
- ◆なぜ人は 限界ばかり創り出す
神の視点に 立てばいいのに
野崎 隆幸
- ◆家離れ ケアハウスへと入居して
窓を開ければ わが家の方へ
梶原恵美子
- ◆水溜まり 入道雲の 映りゐて
眺むる胸に 逝きし娘のこえ
浦野 嘉恵

俳句 《大石ひろ女選》

- ◆ハンガーの 残るベランダ 鰯雲
大谷 和
- ◆今日の月 又来る雲に 隠れけり
武富 律子
- ◆球児等の 姿たのもし 炎天下
本村 則子
- ◆二の腕の 細くなりたる 残暑かな
富樫 明美
- ◆雨降らぬ ままの暮らしに 九月来る
大石ひろ女

川柳 《多久川柳会 互選》

- ◆米作り 足りぬ余ると 悩ませる
高塚 ちかこ
- ◆停年に 成って 気にせぬ 空模様
西山 残月
- ◆お化け屋敷 至る所で 叫び声
田中 正春
- ◆宝くじ 運を呼ぶにも 金が要る
松下 修
- ◆てるてる坊主 空はよい子に 嘘つかぬ
田代まつこ